

# 中国国内の大学における日本語学科の カリキュラムに関する考察

李 彩蘭

## はじめに

中国国内で学術研究及び専門的な教育を行う高等教育機関における学部・学科別課程認定は、今までは中国教育部から高等教育指導書類の一つとして制定された『普通高等学校本科専攻目次』により行われてきた。中国建国以来教育部は1987年、1993年、1998年、2012年の四回にわたって『普通高等学校本科専攻目次』を発表し、高等教育における学部・学科領域と専攻教育課程に対して調整を行った。2018年1月には、既存の『普通高等学校本科専攻目次』に基づいて教育部の高等学校教育指導委員会により制定された四年制大学92の分野の587の学科に向ける『普通高等学校本科専攻類教育質国家標準』を初めて発表し、中国国内の各大学が人材養成案を作成する基準とした。高等教育の外国語教育においては『外国言語文学類教育質国家標準』（以下『国家標準』と称する）を発表し、中国の各大学が日本語学科の学生を養成する目標とカリキュラムをデザインする基準とした。

中国教育部の『国家標準』の発表により、高等教育における外国語教育課程の体系的な構築がより完璧になされ、より組織的な高等教育が実施されるようになった。日本語学科が設置されている各大学では、『国家標準』に基づいて自校の日本語学科教師の専攻分野が考慮されたカリキュラムと開講科目別シラバス、評価基準、人材養成目標などを作成することになった。文書としての書類作成も重要であるが、それに基づく具体的なカリキュラムの作成と学生に適した科目別教授方法の実施も高等教育における人材養成のための到達目標の成果向上に直接的な関わりがあると考えられる。

『国家標準』の発表は、中国がグローバル社会のニーズによる外国語人材養成や教育の質的向上を実現しようとする願いの現れでもある。中国の教育事業の面

から見ると、国民教育の各段階での達成目標と教育実施方針がはっきりし、厳しく実施されているように見える。しかしながら四年制大学の日本語学科の学部生が四年間もの間日本語教育を受けてきたにも関わらず日本人とのコミュニケーションがスムーズにできず、簡単な感想文・レポートなども苦手なのはどうしてだろうか。中国の大学は「重点大学<sup>2)</sup>」「普通大学<sup>3)</sup>」、或は大学入学試験の成績による募集順位により「本一<sup>4)</sup>」「本二<sup>4)</sup>」「本三<sup>4)</sup>」という語で中国国内の大学のランキングを表わしている。大学入学試験の成績のいい学生は「重点大学」つまり「本一」レベルの大学に募集されるようになる。「重点大学」「普通大学」などとは関係なく、各大学は教育部に申請して認定を得ることにより日本語学部・学科を設置することができる。各大学の日本語学科の事情と日本語を専攻する学生達の知識獲得能力などには複雑な差があり、そのような事情に合わせ国と各大学の対策はより具体的な養成目標、教育実施システムの構築、評価の方針などが必要となる。筆者は、中国国内の大学のうち創立35年以上であるいくつかの日本語学科の教育課程のカリキュラムに対して調査を行い、筆者の経験により中国における日本語高等教育の現状及び問題に対して考察する。

## 1. 中国教育部の『国家標準』とは何か

『普通高等学校本科専攻類教育質国家標準』は、「中国教育部が世界高等教育発展論を参考にし、学生の立場、社会のニーズ、持続的な改善三つの方面から出<sup>5)</sup>発」し、四年間もかけて制定した中国高等教育学生養成案の基準である。『国家標準』は、2018年1月に中国教育部により発表された『普通高等学校本科専攻類教育質国家標準』の一部で、専門家委員会によって作成された中国教育部の中国の大学における日本語教育実施の指導的な基準となる書類である。『国家標準』は、「略述」「適応する学科」「養成目標」「養成規格」「課程体系」「教員資格」「教育条件」「質的管理」「用語解釈」の九つの項目に分けられて詳しく説明されている<sup>6)</sup>。本節では、九つの項目のうち本稿の研究と関わりのある「略述」の部分と「課程体系」中の日本語学科核心科目と専攻教育科目、卒業論文の内容だけに対して述べる。

『国家標準』の「略述」には、「外国語類学科は我が国の高等学校における人文及び社会科学学科の重要な構成部分で、学科基礎には外国言語、外国文学と地域・国家別研究が含められ、学科を跨る特徴を持つ。外国語類学科は、その他の学科と連携性を持ち、複合型学科或は専攻課程を構築することにより、社会発展のニーズに適応していく。当該標準を外国語類四年制学科の成立・構築と評価の根拠とする。各高等学校外国語類学科は本基準に基づいて、社会発展のニーズに適応し、各大学の特色を体現する養成プログラムを制定すべきである<sup>7)</sup>」と書かれている。『国家標準』が適用する学科は「英語・ロシア語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・アラビア語・日本語などを含む68の言語である」と定められている。

『国家標準』には、日本語学科核心科目は「基礎日本語、高級日本語、日本語会話、日本語視聴説、日本語講演と弁論、日本語閲読、日本語基礎作文、翻訳理論と実践、通訳理論と実践、日本語学概論、日本文学概論、日本概況、文化交流、学術作文と研究方法などである<sup>8)</sup>」と書かれている。「専攻教育科目」に対しては「専攻教育科目は外国文学、外国言語学、翻訳・通訳学、外国語教育、国家と地域研究、比較文学と文化研究、専門分野外国語及び関連専攻教育などに分類され、必修科目と選択科目に分けられる。各高等学校の外国語学科は、自校の人材養成目標と養成規格により教育課程カリキュラムを作成することができる<sup>9)</sup>」と決められている。

大学の卒業論文に対しては、「卒業論文は、学生の習得完了の理論知識を生かした研究力と問題解決力、創造力の養成と評価である。卒業論文の課題選択は学科養成目標と養成規格に符合し、作成は学術規範に符合すべきである。形式としては学術論文、作品翻訳、実践報告、調査研究報告、前例分析などの多様な形式を選択することができる。作品翻訳以外は、一般的に専攻外国語で書くべきである。各学科は卒業論文の課題選択、作成、指導と論文審査などに対する規定を制定し、指導教官の職責、卒業論文作成過程と質的規範を明確にすべきである。指導過程は適当な文書記録を要する<sup>10)</sup>。」と決められている。

『国家標準』は、中国の高等教育機関である各大学が教育課程を編成する基準にはなるが、具体的な教育課程のシステム、科目別シラバスの作成と実施には具

体的な方法の確立が必要となっている。中国の国内大学における日本語学科卒業生のコミュニケーション力、日本語文法知識を含む日本語学の知識、日本文学、日本社会、日本文化に対する知識がしっかり定着いないのは、日本語教育が行われる教育現場、教室活動にも問題が存在していると思われる。

## 2. 中国国内の大学における日本語学科のカリキュラムと日本語教育

中国の高等教育機関である大学は四年制であり、毎年9月に始まって翌年度の6月に終わる。一学年は二学期で、一学期が16週から20週など大学によって違う。各大学は『国家標準』により教育課程のカリキュラムと開講科目別教育概要を作成する。本節では、日本語高等教育を低学年教育と高学年教育に分けて、中国国内の大学で通常行われている日本語学科教育カリキュラムに対して分析を行う。

### 2.1 中国国内の大学における日本語学科低学年のカリキュラムと日本語教育

大学低学年（大学一年次・二年次）で開講される基礎日本語教育に該当する科目は、『国家標準』の日本語学科核心科目によると基礎日本語・日本語会話・日本語視聴説・日本語初級作文などの科目になる。各大学には基礎日本語教育として「精読」「日本語会話」「視聴説」「日本語基礎文法」「範読」などの科目が開講され、ここでは科目別の教育内容と評価方法に対して考察してみることにする。

#### 2.1.1 「精読」

「精読」は、中国国内の大学における日本語学科低学年で開講される科目で基礎日本語教育に分類され、日本語高等教育を支える科目となっている。日本語学科出身の中国人教師が担当し、一年おきに開講され、毎週四回、一回二コマ（一コマ50分）で、指定された教科書の目次どおりに講義が行われている（二年次から週に三回の大学もある）。中国国内でよく使われている教科書としては「一二五普通高等教育本科国家級企画教材」というシリーズ名が書かれている『総合日本語（北京大学出版社）』『日本語精読（外国語教育・研究出版社）』と『新編日本語（上海外国語教育出版社）』などがある。教科書には日本語の文字・語彙・

文法教育を目指した内容が20か30のテーマ別文章と会話文と分けて収録されている。学習成果は普段行われる小テストの成績と出席、筆記試験（120分、A4用紙8枚の分量）である中間試験と期末試験の総合成績により評価される。学生は科目アセスメントに合格するために課題完成以外に予習と復習を行い、教師は教授任務となる教科書の内容の教授を完成するために一方的な説明で授業を行うケースが多い。受講生が少ないとある程度は学生の学習効果に対する調査とテストが行われるが、学生が40人以上になると一人一人に対する学習効果調査ができなくなる。一科目だけで週に四回行われる授業で教師の負担も重く、学生も学習した内容が正しく覚えられているかどうかを確認しないまま新しい内容を学習することになる。「本一」と同じ教科書を使う「本三」の学生は大学三年生であっても日本語の用言の活用さえ正しくできない場合が相当ある。同じ三年生で「本一」の学生であっても日本語動詞の種類がはっきり言えない学生もいる。筆者は、「精読」科目の週ごとの開講回数と教師の説明中心の教授法のせいで、「精読」科目の教育が日本語高等教育の基礎段階で期待される学習成果をもたらしていないと判断する。教科書の内容も中国人の発想で編集された内容が多く、中国国内で通用されている高等教育用日本語教科書は再検討が必要ではないかと考える。

### 2.1.2 「会話」

「会話」の科目は、中国国内の大学の低学年で開講され、週に一回或は二回、一回2コマで授業が行われ、殆どの大学では日本人教師に授業を担当させる（日本人教師と中国人教師二人に各一回ずつ担当させ、週に二回授業する大学もある）。日本人教師であれば、正しい発音で、日本語・日本人発想に合わせた会話の講義ができ、中国人学生が日本人と会話する体験ができると判断されている。日本語会話に関する講義での中国人教師の役割は会話場面の説明や日本語表現、日本文化の説明において重要であると思われる。日本語会話科目の教科書は科目担当教師が日本から持参してきた本・資料にするか、各大学の日本語学科主任教師が指定した教科書にすることが多い。「会話」科目の評価は出席率とロールプレイングで評価されるが、筆記試験を行う大学もある。日本の映画・テレビド

ラマ・アニメの視聴による学生の自律学習も日本語会話学習成果を向上させる要因にもなる。もちろん、日本人居住者の多い大都會の大学、日本からの留学生が多い大学の日本語学科の学生の会話習得機会は留学生の少ない大学より多い。「会話」科目に対して、「視聴説」科目に「話す」「会話」の内容が含まれていると理解して、開講しない大学もある。筆者は、「会話」科目は一つの言語の表現習慣と社会文化に接することのできる重要な科目だと考える。

### 2.1.3 「視聴説」

「視聴説」は、中国国内の大学の低学年で開講される科目である。「聴力」或は「視聴説」という科目名で行われるヒアリングの授業は、20世紀の80年代と90年代の日本語高等教育カリキュラムにもあった科目である。週に一回または二回開講され、レコーダーなどの設備を利用した日本語基礎教育科目である。通常は中国人教師が担当し、レコーダーやコンピューターなどを利用したテストの成績で評価される。「視聴説」科目は、日本語の五十音図の発音から始め、日本語の語彙、日本語の句・文・文章の発音だけではなく、「聞く」「話す」の能力の向上を目指す授業である。中国国内の最初のヒアリング教育は、レコーダーを利用して日本のニュースや昔話、会話文を聞かせ、学生に文字・語彙・句・文・短い文章の順に書き取りの練習を繰り返させたり発音をまねさせたりして、耳が日本語の発音に慣れるようにする教育であった。三年次からは日本のドラマや映画を見せながら、セリフの書き取りをさせたりすることにより、ヒアリングの教育を行ったのである。単純なヒアリングの授業のように見えるが、日本語の会話の習得、日本文化と社会の理解だけではなく、日本の映像作品鑑賞の機会にもなり、日本語教育効果を向上させる科目であった。現在も各大学で「視聴説」という科目名で、週に二回開講されている。

### 2.1.4 作文

『国家標準』には「日本語基礎作文」という項目があり、基礎教育段階で作文教育が行われるように要求している。「作文」科目は各大学の二年次或は三年次

で開講され、中国人教師或は日本人教師が担当している。中国人教師が担当すると作文指導中に作文技術や文法知識を中国語で説明することができ、学生がより理解しやすくなる。逆に日本人教師が担当すると日本語で日本語作文を教えることになり、学生には直接日本人から日本語を学習するさらなる機会になる。評価は、出席率と小テスト、中間試験と期末定期試験の成績による。テスト・試験の内容は教師が提出したテーマで「文章を書く」ことである。作文授業は学生にとっては、単に文章の書き方を習得する授業というだけでなく、正しい文法知識と表現知識を習得する授業にもなる。筆者は「本三」の三年生に作文授業をした経験がある。ほとんどの学生は動詞の活用さえもできない段階であり、シラバス通りに授業を進めることはできなかった。『国家標準』のとおりであれば大学二年間の日本語高等教育で基礎文法ぐらいははっきり覚えているはずであるが、全然そうではないという実情に疑問を持つことになった。作文教育は日本語学習の中級段階での重要な科目であり、教師の選抜から教科書の選定、教授法の研究まで日本語教育者が注目すべき科目ではないかと考える。

『国家標準』の課程体系に基づいて「精読」「会話」「視聴説」「作文」などの科目以外に、日本語文法だけを教える「日本語文法」、日本事情と文学作品及び日本文化に関連する文章を内容として読解力養成を目指す「範読」という科目が開講される大学もある。「会話」と「視聴説」科目は主に日本語の「話す」「聞く」能力を目指す科目であり、「精読」「作文」「日本語文法」「範読」などの科目は語彙・文法・読解力・作文力を目指す科目である。教師による説明と解釈が中心となっている授業、学習の量、筆記テストの評価方法で学習効果を最大に向上させようとするのが中国教育の特色でもあり、このような特色が教授内容の重複にまで繋がっていることがわかる。韓国では、日本語高等教育基礎段階で「基礎日本語」「会話」科目を週に二回ずつ一回一コマ（1コマ90分）にし、大学により「基礎文法」或は「作文」科目を週に一コマ開講している大学もある。中国だけの事情も考えられるが、日本語知識のすべてを教師が学生に教えようとする意識と基礎的な知識だけを教えて、学生の自律学習効果を重視しようとする教育方針

の差でもあると言えよう。中国と韓国との間の日本語教育事情とリソースに存在する差とは関係なく、中国の日本語教育課程のカリキュラムに存在する知識重複教授が適切であるかどうかに対してはより詳しい調査と研究が必要であると考えらる。

## 2.2 中国国内の大学における日本語学科高学年のカリキュラムと日本語教育

『国家標準』の日本語学科核心科目には、「翻訳理論と実践」「通訳理論と実践」「言語学概論」「日本文学概論」「日本概況」「文化交流」「学術作文と研究方法」などの科目名が挙げられている。標準に基づいて国内の各大学の日本語学科高学年（三年次・四年次）では、各大学の特色に合わせて「日本概況」「日本文化」「日本文学」「日中翻訳」「日中同時通訳」「日本新聞講読」「日本国情」「近現代日本文学」「日本古典文学」「日本語言語学」などの科目が開講されている。中国国内において日本語高等教育を行う大学で一般的に開講されているいくつかの科目に対して考察してみる。

### 2.2.1 「日本概況」

「日本概況」科目は、日本地理・日本社会・日本歴史などの内容が含まれる日本事情に関連する知識を教える科目である。大学三年次で開講され、大学により一学期或は二学期にわたって教育を行い、中国人教師か日本人教師が科目担当教師になる。「日本概況」の教育は中国の大学に日本語学科が設置された時から行われている教育で、教科書もよく開発されている。最初は殆ど指定された教科書を利用して授業をしていたが、最近は日本人教師がシラバスを作成し、日本で用意してきた学習資料を授業に利用することも多い。日本事情関連の写真や映像などの資料が十分に利用される時代でありながら、教科書の目次によるシラバスの作成や、教科書の内容を決まった時間内に全部教えようとする圧迫感を伴った授業を行う大学も少なくない。「日本概況」から派生した科目として、「日本事情」「日本地理」「日本歴史」「日本文化」「日中文化比較」「日本新聞閲読」などが挙げられる。

## 2.2.2 「日本文学」

『国家標準』の日本語学科核心科目には「日本文学概論」が含まれ、日本語学科教師の研究分野により「日本文学概論」「日本文学史」「近現代日本文学」「日本古代文学」などの科目が各大学で開講されている。これらの科目は中国人教師が担当し、三年次で一学期或は二学期に渡って開講されている。「日本文学概論」の授業は中国国内の各大学で日本語学科ができた時から開講された科目で講義の歴史も長く、日本文学関連研究者も多い。学習評価は筆記テストで行う場合が多い。担当教師の影響で学生が日本文学史、日本における特定の歴史時代の作者と作品、日本文学の研究方法に接することのできる機会も多く、日本の歴史、日本の文化、日本の社会などの分野に対して理解し、興味を持って将来研究にまで繋げられるはずであるが、実はそうでもない。ある大学の日本語学科の卒業論文のテーマを調べてみたところ日本文学関連の内容を論文テーマにした学生は非常に少なかった。それは、評価を筆記試験で行うアセスメント・ポリシーとゼミ教育に慣れていない教育環境、自律学習に慣れていない学生にその原因があるのではないと思われる。

## 2.2.3 「言語学概論」

『国家標準』の日本語学科核心科目には「日本語学概論」が含まれ、各大学は「日本語概論」科目を開講し、日本語の音韻論・語彙論・文法論・表現論などの専門知識を教えている。大学の三年次で開講され、中国人教師が担当して週一回2コマの講義が一学期間行われる。中国語でできた教科書が使用される大学もあれば、日本語でできた教科書が使用される大学もある。専門分野の講義となり、内容も難しく、言語学分野の人材養成を目指す大学では専攻必修科目として開講している。日本語という言語に対して専門用語で説明できる能力の養成を目指す科目で、高等日本語教育と民間の日本語教育の区別となる科目でもある。科目評価はレポート提出による大学もあるが、筆記試験で評価する大学のほうが多いようである。この科目は将来の中国人日本語学研究者の養成と直接的な関係のある科目だと思う。「日本語学概論」の授業で、学生に「日本人学者によって書かれ

た論文を読むこと」「言語学関連のレポートを提出すること」などを要求するのも学習成果を向上させるにはよい教授法だと思われる。

## 2.2.4 「卒業論文」

『国家標準』の課程体系には「卒業論文」が含まれ、中国国内における大学の学士学位の授与には「卒業論文」が必要である。卒業論文のテーマは四年次前期に決められ、中国人教師が指導教師となり、四年次の第二学期の半ばに校内での論文審査が行われる。論文は必ず日本語で作成するように要求され、文法と表現の正しい応用だけではなく、研究を前提とした論文作成技術まで要求される。三年次の第二学期或は四年次の第一学期に「学術論文」という科目が開講される大学もある。中国人教師が担当し、一学期間だけ週一回の授業が行われる。ゼミ授業もなく、筆記試験による学習成果の評価だけが認められている中国高等教育事情において、論文の書き方に関する数多くの決まりごとを一学期間で教え、研究論文作成まで要求することは無理である。大学高学年の学生に学術論文を読ませる習慣も、レポートと小論文を提出させる機会も増やしていく必要があるであろう。論文作成経験がないのに論文作成が要求される学生、専攻以外のテーマの論文を指導しなければならない教師（中国国内の日本語学科教師の研究分野は日本語教育、日本語学、日本文学、日本文化が多い）、国が定期的に行う各大学向けの学生論文管理に対する審査などは中国国内の外国語教育者が直面する現実でもある。

韓国の大学の日本語学科では、学部生段階で学位授与の一つの基準として卒業論文代わりに卒業試験の合格が要求されている。韓国にも卒業論文で学士学位を授与した時代があったが、水準に達していない学生に再度論文を書かせ、大学教師が論文とも言えない論文を指導し、審査を行うことは、不適切なシステムと認められ、実現可能な範囲内で最高教育効果をもたらすシステムを構築するための工夫をしてきたのである。文法、表現さえも正しく書かれていない論文を指導する教師の立場、教師自身の研究分野でもないテーマを指導しなければならない教師の立場、指導教師に論文をしっかりと直すように言われても自分の努力では正し

く直せない学生の立場などを考えれば、大学卒業生中心に行われる論文代筆は理解出来ないことでもない。悪循環をもたらす教育課程カリキュラムは訂正が至急ではないだろう。

中国国内の日本語高等教育における大学高学年の教育は、カリキュラムデザインはしっかりできていると思われる。中国で大学教師が作成するシラバスはただ大学に提出するだけの授業計画となり、学生には渡さないのである。教師は教科書の目次どおり講義をし、学生は教師が教える内容通り勉強することに慣れ、教師が授業中に多く説明していなかったり、宿題を多く出していなかったりすると教師も学生も不安になる傾向がある。項目別査定内容がはっきりした筆記試験で学習評価を行っていないと教師の教授態度が疑われる可能性もあるという判断で、学生のレポート作成、小論文作成のための練習が少なくなってしまう、人材養成目標の達成が計画どおりいなくなる。日本語概論・日本歴史・日本文化・日本社会・日本文学などの分野の教育はゼミ授業やレポート・小論文作成による評価が適切であるにも関わらず主に知識の暗記により教育が行われることは適切ではないと筆者は考える。

### 3. 中国国内の大学での日本語学科教育における問題点

大学生募集人数が増えるに従って、中国高等教育における日本語教育は、ある分野の専門人材を養成するという面では国家の目標どおり実現できなかった大学もあるようだ。今まで日本語教育・研究機関・企業・政府の外事関連部署・観光関連会社などの各分野で活躍している専門人材は、大学卒業後の学歴教育、ある分野に従事してからの学習を通じて専門分野の知識習得を実現したのではないか。本節では、中国の『国家標準』に基づく日本・日本語関連学科の高等教育において存在する問題について述べたい。

#### 3.1 大学の日本語学科教育における教授内容の重複に関する問題点

第2節で述べたとおり、教育課程のカリキュラムによる知識の重複がかなりあ

る。学生と教師の時間をより効果的に利用するには、合理的なカリキュラム作成が必要となる。中国の高等教育課程のカリキュラムをみると、日本語の文字・文法・会話・文化知識は「精読」「範読」「作文」「日本語文法」などの科目、日本語の会話は「会話」「視聴説」などの科目を通じて教えるようになっている。カリキュラム設定上、内容の重複もかなりあり、授業のコマ数も多く、教師にも学生にも負担がかかるカリキュラムになっている。教える内容が多ければ多いほど、記憶による評価が重視されればされるほど学生の自律学習の時間、思考の時間、研究の時間が少なくなる。一気に多くの知識を教えようという考え方よりも、最も基本の知識を理解しやすく、しっかり教えようとする意識の確立が必要である。

### 3.2 日本語高等教育のための教科書の問題点

中国国内における各日本語高等教育機関では『国際標準』により、大学別の特色のある教育課程カリキュラムと科目別「教育概要」を作成し、教科書を決めるようにしている。既存の教科書は内容が古く、学習量が多いという問題が存在する。各大学で使用される日本語学科の教科書に日本国の教育で使用される文章、日本語の知識、日本社会の基本的な知識と言える文章、日本社会事情に合わせた会話文、日本国民によく知られている文学作品、日本の各分野の研究者によって書かれた論文がどれくらい収録されているかによって日本語学科教育の成果が決められると考える。特に基礎教育段階で中国事情に合わせた日本語会話文とか、中国人の発想によって書かれた日本語の文章などは、日本語らしい日本語の教育、日本地域研究に役立つ知識の教育にはならないであろう。教育現場と学生の専攻分野に合わせた教材の開発、教授内容の確認、学生の自律学習・研究力の開発などを十分に考慮した教科書とシラバス作成こそが中国国内における日本語高等教育現場の教育者にとって第一の課題ではないか。

### 3.3 学生の学習成果を評価する際の問題点

中国国内の日本語高等教育課程で実施される評価方法には、プレテスト、中間試験、期末試験などの種類がある。「会話」と「視聴説」の科目ではインタビュー

テスト、ヒアリングテストが行われ、高学年で開講される科目では筆記試験以外に、レポート提出で評価が行われる場合もある。韓国の千昊載は『日本語教育論』で、「学生の学習成果の評価方法には能力熟達度テスト、到達度・達成度テスト、診断テスト、集団準拠テストと目標準拠テスト、客観テストと主観テストなど様々なものがある」と述べている。学習評価の目的は、教師が学生の学習効果を確認する以外に、学生自身にとっては学んだ知識に対する整理、理解の確認、学習動機の獲得の機会でもある<sup>6)</sup>。信頼性・妥当性・客観性を持つ評価方法に対する研究も必要である。学生の学習評価に対する専門用語の研究も盛んに行われる日本と韓国に比べて中国の研究は多少遅れているようにも思われる。高等教育高学年の教育課程では、単純なレポート提出よりゼミ授業、小論文作成などの教育も積極的に行われるべきであるが、それに対する国の評価基準の制定の未熟さによって教室活動の指導者になる教師と学習主体である学生にマイナスの影響を与えるのは避けるべきである。『国家標準』には、社会人材ニーズによる人材育成プログラムに対する要求がはっきり考慮されているものの、高等教育機関における人材養成の目標達成は各大学の實力と教育現場の教師の工夫にかかっていると思われる。

中国の日本語高等教育に存在する問題としては、教師に対する評価と保護、中国社会の大学教育に対する理解、大学院生の募集と育成、研究資料索引などの面にも問題が存在しているが、高等教育における養成目標と課程カリキュラムに対する再認識、授業方法と評価方法に対する考察と研究が一番至急であると思われる。

## 終わりに

四年制本科教育つまり大学教育は高等教育の中でも最も基本的な基礎教育ではないかと思われる。結局、修士課程教育、博士課程教育の成果も高等教育における基礎段階教育となる大学教育の質の影響を受けるだろう。近年、中国国内における高等教育分野では「学科建設」「科目設計」という語が頻繁に使われる。こ

れをきっかけに、本稿では中国の改革開放以来の大学における日本語教育を振り返りながら、大学の日本語教育における現状と問題点に対して考察したのである。

本稿の考察により下記のことがより明らかになった。

① 日本語教育における中国国内の高等教育の『国家標準』が観察でき、中国における大学の日本語教育課程のカリキュラムのデザインに存在する知識重複が観察できた。知識重複のある外国語教育の効果に対してはより詳しい調査と研究が必要であると思われた。

② 中国では高等教育用教科書の開発に力を入れていながらも、これほど広い国土で使用されている日本語高等教育用教科書は指で数えられるほどに限られているということがわかる。つまり、中国大学は多様性を失った同じサイズによる日本語基礎教育を実施しているように感じられる。中国の大学日本語教育は教科書に対する依存度が高く、研究者・教育者としての大学教師個人の教育計画・シラバス作成などは重視されていないことがわかった。

③ 中国の大学における日本語教育現場では、国及び大学から目標を立てて教師と大学生に目標達成を要求するだけで、知識に対する学生の理解度、参考書と学術論文及びその他の読書行為と活動は重視されていないことがわかる。「読書は重要」という世論で、読書が重要であることがわかっていながらも、「暗記」による圧迫で「思考」の機会も時間もない教育に傾いていることが観察できた。

筆者が中国国内で日本語を教えながら感じたことは、教師が「教科書の任務を完遂しなければならない」ことと「学生が覚えるようにする」ことの中でやむを得ず選択しなければならないのは「任務の完遂」だということである。中国は、本格的な日本語高等教育の歴史は韓国などの国に比べて短いけれど、学習者は世界一多い国でもある。しかしながら、中国国内における日本語高等教育の成果実態に対しての調査はあまり詳しく行われていない。今後、中国国内における日本語学科の教育実態に対する調査と研究にも注目し、日本語高等教育課程カリキュラムのデザイン、科目別シラバスの研究を続けていきたいと考えている。

## 注

- 1) 「本科」は四年制大学を表わすもう一つの中国語表現で、「専攻目次」は中国四年制大学学部・学科別カリキュラムのことをいう。
- 2) 「重点大学」とは中華人民共和国国内でその建設が重点的に支援される大学で、時代によって違う意味を持つ。2017年、中国政府は『世界一流大学と一流学科建设高等学校及び学科名に関する通知』で137校を重点大学と認めた。本解釈は、中国のホームページ「百度百科」の「解釈」に基づいた筆者の日本語訳である。
- 3) 「普通大学」は普通高等学校の略称である。普通大学は、国家教育部或は省級教育行政部門（自治区、直轄市などを含む）に主管される高等教育を実施する学校である。本解釈は、中国のホームページ「百度百科」の「解釈」に基づいた筆者の日本語訳である。
- 4) 「本一」「本二」「本三」というのは「本科一級」「本科二級」「本科三級」という意味で中国国内の大学のランキングを表わす表現でもある。
- 5) ～10) は、筆者による『国家標準』の日本語訳である。
- 11) 佐藤浩章『大学教員のための授業方法とデザイン』玉川大学出版部 2016年 38ページの引用